

検討した。【結果】低体温により白血球数は影響を受けなかったが、リンパ球比率は35℃以下の全例で低下した。リンパ球サブセットは34.5℃以下で、Tリンパ球なかでもCD8陽性細胞比率が低下した。これらは復温後正常化した。リンパ球幼若化反応は34℃まではほぼ保たれていた。NK細胞の比率は34.5℃以下で低下した。またNK活性は35℃以下で低下した。NK活性低下は低体温導入直後より出現し、低体温中続き、復温後改善された。NK活性低下は低体温がサイトカイン、あるいは表面レセプターを介し影響を及ぼした可能性が示唆された。【結論】1. 低体温により白血球数は影響を受けなかったが、リンパ球比率は35℃以下の全例で低下した。なかでも、Tリンパ球特にCD8陽性細胞比率が低下した。しかし34℃までの低体温はリンパ球幼若化反応には影響を及ぼさなかった。2. NK細胞比率は34.5℃以下の多くの症例で低下し、NK活性は35℃以下のほとんどの症例で低下した。3. 低体温による免疫能低下は、Tリンパ球およびNK細胞比率の低下、ならびにNK活性の低下による可能性が示唆された。

6) Intracellular arachnoid cyst の1例

玉谷 真一・外山 孚
北沢 智二・大石 誠 (長岡赤十字病院)
斎藤 有庸 (脳神経外科)

Intracellular arachnoid cyst の一手術例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。

症例は59歳女性。2年前から視野狭窄に気づくも放置。その後徐々に視力低下、視野狭窄が進行したため眼科受診、両耳側半盲及び視力低下を指摘され当科紹介され受診した。craniogram では sella の拡大が認められ、CT および MRI にて intracellular から suprasellar にかけて cystic mass が認められた。内溶液は髄液と同等と考えられた。右 subfrontal approach にて cyst の開放術を行った。cyst 内溶液は髄液様で、病理診断は arachnoid cyst であった。症状出現後比較的長期の経過にも関わらず、術後速やかに視力、視野ともに改善した。

Intracellular arachnoid cyst は比較的希な疾患とされる。鑑別すべき benign intracellular cyst としては Rathke's cleft cyst, Epidermoid cyst, Pars intermedia cyst などが考えられる。治療方法としては開頭術による cyst の開放、および transphenoidal approach による cyst 開放術があるが、後者の場合

髄液漏や髄膜炎等の合併が比較的高率に起こるとの報告が多く、開頭術の方が better と考えられる。Intracellular arachnoid cyst の発症機序としてはいくつかの説があるが、empty sella がもともと存在し、そこに何らかの炎症機転が働き憩室入口部のくも膜が癒着し憩室が正常くも膜下腔との交通を断たれ cyst が形成されるとする説が有力である。われわれの症例も比較的厚いくも膜に被われた cyst であり、同様の発症機序で生じたものではないかと考えられた。

7) 診断に苦慮した傍鞍部腫瘍の1例

中島 拓・森 修一
長谷川顕士・土屋 尚人 (水戸済生会総合病院)
早野 信也 (脳神経外科)

症例：63歳女性、右前額部から鼻弓の鈍痛と複視で発症。右眼球の内上下転制限と右眼瞼下垂、右三叉神経第1-2枝領域の知覚障害を認めるが、視力視野は正常。血液生化学検査では炎症所見なく、下垂体前葉機能を含め異常なし。MRI では辺縁不整だが、境界明瞭で、傍鞍部から後篩骨洞、蝶形骨洞に及び Gd 造影にて網状に造影される腫瘍像が認められた。嚢胞、石灰化、出血の所見無し。鞍上部、斜台への進展は軽度で、右内頸動脈は上外側後方に偏位し、脳幹と腫瘍に連続性なし。脳血管造影で腫瘍陰影なし。経鼻的生検術を行い、HE 標本で、mitosis 認め、核小体が明瞭な円形細胞の密集を認めたためリンパ腫を疑った。しかし免疫染色では、ケラチン、EMA、LCA、NSE が陰性で、HMB-45が強陽性、S100が陽性であることから amelanotic melanoma と診断された。なお転移性黒色腫を思わせる原発巣は全身検索にても指摘できず。ステロイド投与と放射線照射を行い、症状は著明に改善したが、照射後のMRIでは腫瘍の縮小は見られなかった。

考察：頭蓋内悪性黒色腫は主に脳軟膜に原発し、メラノプラストの多い脳幹腹側が好発部位だが、本例ではMRI上腫瘍と脳幹の連続性は見られない。また、副鼻腔粘膜に原発した黒色腫は通常、副鼻腔に広範に進展した後頭蓋内に進入する。本例は内頸動脈の上外側、後方変位からは副鼻腔粘膜からの発生をより強く疑うが、悪性黒色腫としては稀な発育形態である。

黒色腫の組織免疫染色では HMB-45, Fontana Masson 染色, CD68, S100 protein などのマーカーが知られるが、HMB-45は黒色腫に特異性が高く、S100は感受性が高いとされる。本例は両者が陽性であ